

# 再説 芥川龍之介『歯車』考

——芸術家の肖像——

菊地 弘

一

『歯車』は岩波版『芥川龍之介全集第九巻』(一九七八・四・二四)の後記によると昭和二(一九二七)年六月一日発行の雑誌「大調和」に『歯車』という表題で「一 レエン・コオト」の章だけが載った。が、「レエン・コオト」という題はついていない。のち昭和二年十月一日発表の雑誌「文芸春秋」に「レエン・コオト」も再録して表記の題で掲載された。各章の末尾に脱稿日が付されている。即ち「一 レエン・コオト」は昭和二年三月二三日、「二 復讐」は昭和二年三月二七日、「三 夜」は昭和二年三月二八日、「四 まだ？」は昭和二年三月二九日、「五 赤光」は昭和二年三月三〇日、「六 飛行機」は昭和二年四月七日と

なっている。

『歯車』の原題は最初「ソドムの夜」、ついで「東京の夜」と訂正され、さらに「東京」が消され、「夜」だけ残ったが、佐藤春夫は「夜」と書いてあった原稿を見せられて、「夜」では個性がなさすぎるという「歯車」という題を薦めた、芥川は即座にそう直したと、既に言われている。宮坂覺氏は「ヘソドムの夜」の彷徨」という視点から、三嶋譲氏は「復讐の神」をめぐって、「或狂人の娘」の虚実」の観点から、奥野政元氏は文体の面から、それぞれ作品の内実における論を書いている。そうした論を踏まえながら作品が示すもの、しめされるものを探ってみたい。

筋のない小説と言われるが、松林の家を出てホテルで行われる結婚式

に出、ホテルに泊りながら、銀座や青山を歩き、またペンをとって仕事をし、また松林の家に戻ってゆくという構成になっている。また「レエン・コウト」には今後作中展開するものが示されている。〈松林〉の家を考えていると〈半透明の歯車〉が見える。これは不安な状況を示している。また、レエン・コウトを着た幽霊の話、電車の前に座ったレエン・コウトを着た男、ホテルのロビーの長椅子の背に掛けられたレエン・コウトなど〈僕〉の前にしばしば現れるレエン・コウトは、義兄がレエン・コウトを着て自殺するに到って、滅びを予兆するものとなる。

また皿の肉の〈蛆〉、廊下をゆく〈僕〉の耳をかすめていった〈オオル・ライト〉という表徴的な言葉も滅びの予兆である。〈オオル・ライト〉は運命の道行を着々と辿っているということは何ものかが〈僕〉に示したと考えられる。さらにまた、一人前の女を感じさせるような女生徒の言動や、気狂いめいた電車の中の女の子の様子もセクシャルなものを暗示し、〈僕〉の不安にからまってくるのではないか。ほかにも真夜中、執筆中にきこえる〈翼の音〉など、展開の中で関連してゆく事象が盛り込まれている。このような点に作者の知的な計量が窺えるのである。

まずこの作品に感じるのは、指摘されていることではあるが、色彩語が多くつかわれていることである。例えば、〈白地に細い青い線〉、〈褐色の紙〉、〈黄いろい車〉、〈この黄いろいタクシイはなぜか僕に交通事故故の面倒をかけるのと常としてゐた〉、丸善の二階の書棚にストリンドベルクの「伝説」を見つける。〈それは僕の経験と大差ないことを書いたものだった。のみならず黄いろい表紙をしてゐた〉、〈黄いろい書

簡箋に目を通した〉、〈黄ばんだ松林の向うに〉など黄色に不吉なイメージを託している。また〈僕は縁起の好い緑いろの車を見つけ〉、〈緑いろの表紙をした一冊の本へ目を通した〉、〈彼女の着てゐるのは遠目に見ても緑いろのドレスに違ひなかつた。僕は何か救はれたのを感じ、ちつと夜のあけるのを待つことにした〉と描かれる。また、〈白い小型の看板は突然僕を不安にした〉、〈いつか僕の影の左右に揺れてゐるのを発見した。しかも僕を照らしてゐるのは無気味にも赤い光だつた〉、〈歌集『赤光』の再版を送りますから……〉／赤光！ 僕は何ものかの冷笑を感じ、〈赤いワン・ピイスを着た女は小声に彼等と話しながら、時々僕を見てゐるらしかつた〉、〈セピア色のインクはどのインクよりも僕を不快にするのを常としてゐた〉、〈僕はこのカッフェの薔薇色の壁に何か平和に近いものを感じ〉などと色彩による暗示を描いている。つまり色彩に、不安、不快、平和など心情を託す。色彩に意味を託した表現である。

披露宴の皿の上の肉に蛆がいた。蛆は〈僕〉の頭の中に〈worm〉という英語を呼び出す。晚餐後ホテルの不気味な監獄のような感じの廊下を通過して、とっておいた部屋に入る。

それから鏡台の前へ行き、ちつと鏡に僕の顔を映した。鏡に映った僕の顔は皮膚の下、骨組みを露はしてゐた。蛆はかう云ふ僕の記憶に忽ちはつきり浮かび出した。「レエン・コウト」(傍点 菊地)

とあるように、鏡の中の骸骨のような顔に、蛆を思い浮かべ、死を連想する意識を描いている。また更に、〈何か精神的強壯剤を求める為に〉、本

屋へ出かけようと外出すると、冬の日の当るアスファルトの上に紙屑がいくつもころがっている。

それ等の紙屑は光の加減か、いづれも薔薇の花にそっくりだった。

僕は何ものかの好意を感じ、その本屋の店へはひつて行つた。そこも亦ふだんによりも小綺麗だった。唯目金をかけた小娘が一人何か店員と話してゐたのは僕には気がかりにならないこともなかった。けれども僕は往來に落ちた紙屑の薔薇の花を思ひ出し、「アナトオル・フランスの対話集」や「メリメエの書簡集」を買ふことにした。「四まだ？」

とあるように、意識に浮かんでくる多彩なイメージによって、意識の転調をはかる。詩的な色彩を帯びたスタイルと言えよう。こういうスタイルは作品の中に「詩を織りこむ」(柴田多賀治)ことで創られると思われる。そのような意味で、芥川の主張する最も純粹な小説となつていゝと考へる。

## 二

また対極的な語が多くつかわれている。特に黒と白が何回も強調される。これは「五」「六」の章で顕著である。例えば、ウイスキーの商標が、〈Black and White〉と英語で綴られたり、またへブラツク・アンド・ホワイトと片仮名で繰り返されたり、へ半面だけ黒い犬は四度も僕の側を通つて行つた、この土地に住んでゐるスウェーデン人の名がストリンダブルグでそのへタイも黒と白だったのを思ひ出した、

妻の実家へ行き庭の隅の金網の中にへ白いレグホオン種の鶏が何羽も静かに歩いてゐた。それから又僕の足もとには黒犬も一匹横になつてゐた。またライプツィヒの本屋からへ近代の日本の女とていう小論文を書けという印刷物が届いた。英語の手紙にはへ我々は丁度日本画のやうに黒と白の外に色彩のない女の肖像画でも満足である、という肉筆の追加文があった。このへ黒と白からウイスキーのブラック・アンド・ホワイトを連想して、ずたずたに手紙を破ってしまった。ある。へ僕は不快な、不調和な氣持に追い込まれるのである。つまり、対極的な語に主人公へ僕の心象が刻まれている。

「六」章でへ僕と妻の母や弟が世間話をするところがある。その対話の一部に、

「兄さんは僕などよりも強いんだけど、——」

「強い中に弱いところもあるから。……」

(中略)

「妙に人間離れをしてゐるかと思へば、人間的欲望もずぶん烈しいし、……」

「善人かと思へば、悪人でもあるしさ。」

「いや、善悪と云ふよりも何かもつと反対なものが、……」

「ぢや大人の中に子供もあるのだらう。」

「さうでもない。僕にははつきり言へないけれど、……電氣の両極に似てゐるのかな。何しろ反対なものを一しよに持つてゐる。」

とあるこのやりとりは、同時にへ僕の内実を示すものとなつており、

〈僕〉のインデックスとなってもいい。作品の絵解きにも相当するのである。対極的な表現を通して相関的な関連性の中で物事を認識する主人公の肖像が浮んでくるようだ。

また「語」で気付くことは〈へのみならず〉<sup>(5)</sup>という表現の多用である。一例をあげれば、

僕はこの小説の世界を超自然の動物に満たしてゐた。のみならずその動物の一匹に僕自身の肖像面を描いてゐた。(五 赤光)

とあって、視点を一つとしないで、一度言い切ると〈へのみならず〉と続けて他の視点を持ち出す。つまり二つのものを同時に見ていることになる。その意識は多層的重層的であると指摘できる。相対的に関係性をもって認識する心的作用の表われである。

そのことと関連して言うと、〈破壊欲を感じ〉るとか、〈反抗精神の起る〉とかいう表現が見出されることも指摘しておきたい。「レエン・コウト」で、漢学者と一角獣やフェニックスの話をしている〈僕〉は、機械的にしやべつてゐるうちにだんだん病的な破壊欲を感じ、堯舜を架空の人物にしたのは勿論、「春秋」の著者もずつと後の漢代の人だったことを話し出した。

とあって、漢学者の不快をかう条りがある。また「三夜」で丸善の二階で本を見ているうち、〈僕は〉手当り次第に一冊の本を引きずり出す。

しかしこの本も挿し画の一枚に僕等人間と変りのない、目鼻のある歯車ばかり並べてゐた。(それは或獨逸人の集めた精神病者の画集だった。僕はいつか憂鬱の中に反抗精神の起るのを感じ、やぶれかぶれ

になつた賭博狂のやうにいろいろの本を開いて行つた。と書いている。さらに宗教の本に、

「恐ろしい四つの敵——疑惑、恐怖、驕慢、官能的欲望」と云ふ言葉並べてゐた。僕はかう云ふ言葉を見るが早いか、一層反抗的精神の起るのを感じた。これ等の敵と呼ばれるものは少くとも僕には感受性や理智の異名に外ならなかつた。

と鋭い諷刺をなげかけている。また、

ふと宮城の前にある或銅像を思ひ出した。この銅像は甲冑を着、忠義の心そのもののやうに高だかと馬の上に跨つてゐた。しかし彼の敵だつたのは、——「謙」

と捉える。楠木正成は忠義の心そのものの人物として高だかと馬に跨っている。しかし正成の敵は、歴史でいわれているものではないかも知れない。従来の歴史観は「謙」とすれば正成の忠義そのものの姿も「謙」と擱んでいるのである。これはやはり逆の視点に立って相関的認識の態度からくるものであって、通念や既存の倫理に対する反抗意識が描かれていることになる。

「五 赤光」で、養父母の家を思い出し、家族の絆を思う。

——しかし僕はそこへ帰ると、おのづから僕を束縛してしまふ或力を恐れずにはゐられなかつた。運河は波立つた水の上に達磨船を一艘横つけにしてゐた。その又達磨船は船の底から薄い光を洩らしてゐた。そこにも何人かの男女の家族は生活してゐるのに違ひなかつた。やはり愛し合ふ爲に憎み合ひながら。……が、僕はもう一度戦闘的精神を

呼び起し、ウイスキーの酔ひを感じたまま、前のホテルへ帰ることにした。

と家族のところへ帰らず、執筆の場であるホテルへ戻るのである。そのように家族や家族の絆から隔たろうとすることと絡んで、親和力の問題が提示されている。

「四 まだ？」は、死はまだかの意に解せるが、〈僕〉の入ったカッフェで母と息子が顔を近づけて話し合っている。〈その息子は僕よりも若かつたものの、殆ど僕にそっくりだつた〉。息子は母に性的にも慰めを与えていることを意識しているのに〈僕〉は気付く。

それは僕にも覚えのある親和力の一例に違ひなかつた。同時に又現世を地獄にする或意志の一例にも違ひなかつた

として、鋭い眼差しで親和力に潜む地獄を透かして見ている。同じようなことは「五 赤光」にも描かれる。〈僕〉は或る老人を訪ねた。祈禱や読書に精進している老人も〈亦親和力の為に動かされてゐることを発見した〉という。

「その植木屋の娘と云ふのは器量も善いし、気立ても善いし、——それはわたしに優しくしてくれるのです。」

「いくつ？」

「ことしで十八です。」

それは彼には父らしい愛であるかも知れなかつた。しかし僕は彼の目の中に情熱を感じずにはゐられなかつた。のみならず彼の勧めた林檎はいつか黄ばんだ皮の上へ一角獣の姿を現してゐた。

と見つめている。家族や異性との間に働く親和力が深い絆を創るものであると同時に、地獄をもつくと〈僕〉は認識している。親和力は恋人同志にだけ生ずるのではない。家族の間でも親和力が深い絆をつくってゆく。そのことが人間を拘束し、落ち込んだ時に「狂喜か破壊か」(片岡良一)となる。神経を苛み、存在の危機をもたらしたものは親和力であるとしている。

### 三

さて対立的な表現の意味を探つて来たが、「物」に付されたイメージのことである。既に多くの評者によって言われているヘレン・コウトに付されたイメージのことは、本論の前章でこの作品の構成に関連して触れた。「一」「二」「六」の章のヘレン・コウトを着た男は、「一」章で姉の夫が〈季節に縁のないレエン・コウトをひつかけて〉轢死したことから、死の予兆の暗号となっているが、同様なことが〈翼〉という語にも言える。〈翼〉は「一」、「五」、「六」の章に何回か出ている。短篇を書き続ける夜中、〈時々戸の外に翼の音の聞えることもある〉、夢から醒めた部屋に〈どこかに翼の音や鼠のきしる音も聞えてゐた〉、自動車の商標から〈人工の翼を手たよりにした古代の希臘人を思ひ出した〉、〈巻煙草はなぜかエエア・シツプだつた。(中略)人工の翼はもう一度僕の目の前へ浮かび出した〉などと繰り返される。これは超えんとする詩的精神、或いは芸術への意思の暗号と私は考える。

また、全章に亘つて〈鼠〉という死を表徴する語が出てくる。該当個

所をあげてゆくと、

「あすこに女が一人ゐるだらう？ 鼠色の毛糸のシヨオルをした、

……」(一 レエン・コウト) (傍点菊地、以下同様)

朝ベッドをおりようとすると、スリッパが片方しかない。〈僕〉は不安になって給仕を呼び、探してもらうことにした。

「ここにありました。このバスの部屋の中に」

「どうして又そんな所へ行つてゐたのだらう？」

「さあ、鼠かも知れません。」(二 復讐)

また、トルストイの「ポリコーチカ」を読みはじめた〈僕〉が、その主人公に〈僕の一生のカリカチュア〉を見て〈くたばつてしまへ〉と本を投げる、

すると大きい鼠が一匹窓かけの下からバスの部屋へ斜めに床の上を走つて行つた。僕は一足飛びにバスの部屋へ行き、戸をあけて中を探しまはつた。が、白いタツブのかけにも鼠らしいものは見えなかつた。僕は急に無気味になり、慌ててスリッパを靴に換へると、人気のない廊下を歩いて行つた。(二 復讐)

夢の中でみる風景で、ミイラに近い裸体の女がこちらを向いて横になっている。それは〈僕〉の復讐の神であり、狂人の娘である。

僕は目を醒ますが早いか、思はずベッドを飛び下りてゐた。僕の部屋は不変電燈の光に明るかつた。が、どこかに翼の音や鼠のきしる音も聞えてゐた。(三 夜)

とある。不吉と不調和の心を写している。

俗事から解放され芸術三昧の心境で原稿用紙に向つてゐるところに、電話がかかつてきた。

電話は何度返事しても、唯何か曖昧な言葉を繰り返して伝へるばかりだつた。が、それは兎も角もモ、オルと聞えたのに違ひなかつた。僕はとうとう電話を離れ、もう一度部屋の中を歩き出した。しかしモ、オルと云ふ言葉だけは妙に気になつてならなかつた。

「モオル——Mole……」

モ、オルは鼯鼠と云ふ英語だつた。この聯想も僕には愉快ではなかつた。が、僕は二三秒の後、Moleを「la mort」に綴り直した。ラ・モ、オルは、——死と云ふ佛蘭西語は忽ち僕を不安にした。死は姉の夫に迫つてゐたやうに僕にも迫つてゐるらしかつた。(四 まだ?)

とあつて、得たいの知れない、死を予告する電話を描いている。日の光は僕を苦しめ出した。僕は實際鼯鼠のやうに窓の前へカアテ、ンをおろし、昼間も電燈をともしたまま、せつせつと前の小説をつづけて行つた。(五 赤光)

同じ章で、バアで隣りに座つてゐる新聞記者らしい男二人がフランス語を使って〈僕の噂をしてゐるらしい〉。その会話の一片、

「Pourquoi?……le diable est mort!」

が耳を打つたことを捉えている。

向うから自転車に乗つた男が近づいてくる。

僕はふと彼の顔に姉の夫の顔を感じ、彼の目の前へ来ないうちに横の小みちへはひることにした。しかしこの小みちのまん中にも腐つた

鼯鼠の死骸が一つ腹を上にして転がってゐた。

何ものかの僕を狙つてゐることは一足毎に僕を不安にし出した。

(一六 飛行機)

このように観じてきてわかるように、第一章の鼠色が不気味な不吉なもの暗合となつて深まってゆき、遂に死というイメージで最終章に刻まれている。

このように、「色彩」や「物」によって、不安、不吉、平和、芸術への意思、死などのイメージを表わすという方法で示された人間（芸術家の肖像がこの作品のテーマであり、それは一九二七年の文芸思潮の中でユニークな存在論となつていゝと思える。

#### 四

この作品の全章に描かれてゐるのは芸術家の肖像である。すでにあげた条りだが、

僕の姉の夫はその日の午後、東京から余り離れてゐない或田舎に轢死してゐた。しかも季節に縁のないレエン・コオトをひっかけた。僕はいまそのホテルの部屋に前の短篇を書きつづけてゐる。真夜中の廊下には誰も通らない。が、時々戸の外に翼の音の聞えることもある。どこかに鳥でも飼つてゐるのかもしれない。(一レエン・コオト)

ト(傍点菊地、以下同様)

とあるように、死に脅かされて創作に専念している作家の肖像が〈翼〉とともに示されている。そして〈翼の音〉が聞えてくるということに、

滅びの道ゆきから離陸への思念も読みとれる。

「今年が家が火事になるかも知れないぜ。」

「そんな縁起の悪いことを。……それでも火事になつたら大変ですね。保険は碌についてゐないし、……」

僕等はそんなことを話し合つたりした。しかし僕の家は焼けずに、僕は努めて妄想を押しつけ、もう一度ペンを動かさうとした。が、ペンはどうしても一行とは楽に動かなかつた。(二一 復讐)

とあつて、世の中の心配事、世の中の事件に、芸術家の心が苛れてゆく有様を写している。〈松林の中にある僕の家〉、すなわち〈僕〉の養父母の家ではない、自分を中心にした家族のために借りた家を心に浮べながら、〈或事情の為に軽卒にも父母と同居し出した。同時に又奴隷に、暴君に、力のない利己主義者に変わり出した。……〉と告白する。養父母との間の親和力が、〈僕〉を屈辱的なエゴイストに変身させたという、己れへの悔恨と罪悪感を滲ませている。そうした〈僕〉の分析の意識の連続に

前のホテルに帰つたのはもう彼は十時だつた。ずっと長い途を歩いて来た僕は僕の部屋へ帰る力を失ひ、太い丸太の火を燃やした爐の前の椅子に腰をおろした。それから僕の計画してゐた長篇のことを考へ出した。それは推古から明治に至る冬時代の民を主人公にし、大体三十年余りの短篇を時代順に連ねた長篇だつた。(三 夜)

と、〈民〉を主人公にした作品の構想を考えていることを明かしている。それは悔恨と罪の意識からの連想なのであつて、〈民〉を主人公にした

熱い創作意欲には、まさに超えんとする芸術への意思を窺わせるものがある。

第四章で、〈僕はこのホテルの部屋にやつと前の短篇を書き上げ、或雑誌に送ることにした〉とあってから、精神的な強壯剤を求めに外出する。精神的に頑丈になった気持ちで歩いていくうちに友人に会い、『点鬼簿』について〈あれはちよつと病的だつたぜ。……〉と評をされたり、遠目には美しいが、近よってくると醜い女と出会ったり、飾り窓に飾ってあるベエトオベンのいかにも天才然とした肖像に滑稽を感じたり、ベエトオベンも痔に悩んで坐浴をしていたと思つたりしてホテルへ戻ってくる。

一時間ばかりたつた後、僕は僕の部屋にとごもつたまま、窓の前の机に向かひ、新しい小説にとりかかつてゐた。ペンは僕にも不思議だつたくらゐ、ずんずん原稿用紙の上を走つて行つた。しかしそれも二三時間の後には誰か僕の目に見えないものに抑へられたやうにとまつてしまつた。僕はやむを得ず机の前を離れ、あちこちと部屋の中を歩きまはつた。僕の誇大妄想はかう云ふ時に最も著しかった。僕は野蛮な歓びの中に僕には両親もなければ妻子のない、唯僕のペンから流れ出した命だけあると云ふ氣になつてゐた。(四 まだ?)

と書いている。新しい創造に精進してゆく心境がよみとれる。しかし彼の目に見えない何かを筆を抑えようとしている。精神を抑圧するものがある故に、そこで誇大妄想の内で、野蛮な歓びを感じる、つまり両親も妻子もないと振り切つて、専ら創作への道に賭ける命だけがあるのだ

と強調する、意思的な芸術主義の精神を訴えている。〈人は皆無、仕事は全部〉の芸術家の精神を顕在化していることである。『戯作三昧』の馬琴、『地獄変』の良秀を彷彿させるものがよめよう。

また、〈死は僕にも迫つてゐるらしかつた〉という不安の中で〈僕はホテルの庭を眺めながら、

遠い松林の中に焼いた何冊かのノオト・ブックや未完成の戯曲を思ひ出した。それからペンをとり上げると、もう一度新しい小説を書きはじめた。(四 まだ?)

という条りもあり、第五章にも〈昼間も電燈をともしたまま、せつせと前の小説をつづけて行く姿がある。創造への執念を露にしている作家の肖像が浮上してくる。

こうしたなかで運命が迫ってくるのを〈僕〉は感じている。

かう云ふ僕を救ふものは唯眠りのあるだけだつた。(中略)が、絶望的な勇気を生じ、珈琲を持つて来て貰つた上、死にもの狂ひにペンを動かすことにした。二枚、五枚、七枚、十枚、——原稿は見る見る出来上がつて行つた。ぼくはこの小説の世界を超自然の動物に満ちたてゐた。のみならずその動物の一匹に僕自身の肖像画を描いてゐた。

(五 赤光)

とあって、小説『河童』に登場する芸術至上主義者でピストル自殺をする詩人トツクに〈僕〉を重ねていることを述べている、死へ誘われる、なんともいへぬ慄然としたありさまの条りである。死の淵を覗きながら、ペンを必死で動かしている状態、それが先に触れたように親和力の重苦



しさと絡んでいて、超えようとしているが（何ものかの僕を狙つてゐる）という実存の不安や危機の心境に陥っている芸術家の肖像を描いているのである。（僕は九時でもなり次第、或雑誌社へ電話をかけ、兎に角金の都合をした上、僕の家へ帰る決心をした。机の上に置いた鞆の中へ本や原稿を押し込みながら、養父母のいる家ではなく、松林の中にある家に帰る。

やっと家へ帰った（僕）は（二三日は可成平和に暮した）

僕の二階は松林の上にかすかに海を覗かせてゐた。僕はこの二階の机に向かひ、鳩の声を聞きながら、午前だけ仕事をすることにした。

（中略）「喜雀堂に入る。」——僕はペンを持つたまま、その度にこんな言葉を思ひ出した。

と、松林の家で平和な心で執筆に専念している（僕）が存在している。このように観じてきて明らかのように、各章に不安な危機が迫ってくる中で、ペンを走らせるとか、短篇を書く表現があつて、一層芸術に命を賭ける芸術家の意思が刻まれた肖像が浮かんでくる。

そのような中であつて妻が梯子段を慌しく昇つてきたかと思つと、またすぐ駆け下りて行つた。（僕）は驚いて茶の間に顔を出すと、妻は云う。

「どうもした訣ではないのですけれどもね、唯何だかお父さんが死んでしまひさうな気がしたもんですから。……」

それは僕の一生の中でも最も恐ろしい経験だつた。——僕はもうこの先を書きつづける力を持つてゐない。かう云ふ気もちの中に生きて

ゐるのは何とも言はれない苦痛である。誰か僕の眠つてゐるうちに、つと絞め殺してくるものはないか？（六 飛行機）

と書いてこの作品は閉じられる。（最も恐ろしい経験）、それは創作創造の世界から下降した日常的現実での終焉を物語ると換言できる。そして（誰か）に（僕）の死を依頼している。

だが大事なことは、この死の依頼の前に、

すると僕の睡の裏に銀色の羽根を鱗のやうに畳んだ翼が、一つ見えはじめた。それは、実際網膜の上にはつきりと映つてゐるものだつた。

また、

しかしやはり銀色の翼はちやんと暗い中に映つてゐた。僕はふとこの間乗つた自動車のラディエター・キヤツプにも翼のついてゐたことを思ひ出した。……（六 飛行機）

と、超えようとする意思をきちんと訴えていたことであつた。既に明確に芸術創造への意思は（翼）に託して強烈なイメージとして伝えていたことが確認できる。

で、初めから死を予感し、書きつづける（僕）の運命を色彩や物事に託す造形美術的な方法で虚構化して、神秘的に暗示していた。観点を變えていえば、相関的に物事を確認しながら己れの主体性を生かすことゝいかに難しいか、難しいことを知りながら生きてきた芸術家の（己れ）を、死を意識しながら文学的主题として造型したことは、そのことは一九二七年の文学思潮の中で光彩を放つてゐるといえる。

そうして更にこのような肖像を書かせた契機は「二 復讐」に描かれ

ている、道に迷って青山斎場へ出てしまった〈僕〉の思いである。

それは彼は十年前にあつた夏目先生の告別式以来、一度も僕は門の前さへ通つたことのない建物だつた。十年前の僕も幸福ではなかつた。しかし少なくとも平和だつた。僕は砂利を敷いた門の中を眺め、「漱石山房」の芭蕉を思ひ出しながら、何か僕の一生も一段落のついたことを感じない訣には行かなかつた。

後の迫ってくる運命のもと、人生も一段落ついたと感じる中で、漱石の賞讃で芸術家として出発自立した〈僕〉の生涯を省みたことが、主人公を小説家とした肖像画を描かせたのだと考える。

〈十年前〉、それは、久米正雄と上総一宮館に滞在していたところに、漱石の書簡（大正五・八・二四）が届く。漱石は〈世の中は根気の前に頭を下げる事を知つてゐますが、火花の前には一瞬の記憶しか与へて呉れません。うん／＼死ぬ迄押すのです〉〈何を押すかと聞くなり申します。人間を押すのです〉と書いていた。人間主体の芸術への道である。また『文芸的な、餘りに文芸的な』の「十七 夏目先生」の項に〈僕は先生のことを考へる度に老辣無双の感を新たにしている〉と記した勁い態度に驚嘆する漱石観などが芥川の内に飛来していたのである。

そしてまた「二 復讐」の章で注意したいことは、次の条りである。ホテルの廊下は〈不相変牢獄のやうに憂鬱だつた〉と頭を垂れて〈僕は歩いてゆく。同時に又〈僕の墜ちた地獄を感じ〉ていて、

「神よ、我を罰し給へ。怒り給ふこと勿れ。恐らくは我滅びん。」  
という祈禱が口にのぼる。しかしこの祈りの詩は神からの救済を求める

心が根底にあつての祈りなのであろうか。〈我滅びん〉と絶望だけが叫ばれている。そのことは「五 赤光」で、

僕はラスコニコフを思ひ出し、何ごとも懺悔したい欲望を感じた。が、それは僕自身の外にも、——いや、僕の家族の外にも悲劇を生じるのに違ひなかつた。のみならずこの欲望さへ、真実かどうかは疑はしかつた。

とあるように、本心から懺悔をしようという意志があるのかどうか、定まらないのは、神を信じ罪の自覚意識に立つ前に絶望的なニヒリズムの心境を濃くしていたからである。またそのような感覚と心境は、作品の中で、メリメエは〈僕等のやうに暗の中を歩いてゐる一人だつた〉、アナトール・フランスも〈十字架を荷つてゐた〉、「カラマゾフ兄弟」のイヴァン、ストリンドベルグ、モオパッサンらも悪魔に苦しめられていたと捉えそれらの人物に〈僕自身〉を見ていること、その反極に〈暗夜行路〉はかう云ふ僕には恐しい本に変わりはじめた」と「諷刺的」に見詰める〈僕〉の意識もあり、みな脈絡連動し合っているのである。

ニヒリズムに陥って倒れゆく芸術家〈僕〉の肖像を、死の予覚の意識を綴ること刻んでゐる。芸術家の滅びゆく生の様相を主題にした作品である。

なお本稿は第二十一回キリスト教文学会九州支部夏期セミナー（二〇〇〇年八月二日）のシンポジウムにおいて『「菌車」』その示さ

んとしたものの」の題で発表したものに加筆したものであり、題名も  
標題のように変えた。

なお、拙著『芥川龍之介——意識と方法——』（昭和五七・一〇・  
二五）所収の「歯車」論を参照願いたい。

注

- (1) 「歯車」へソドムの夜の彷徨」昭和五六・五、「国文学」。
- (2) 「歯車」解説(一)——〈復讐の神〉をめぐって——一九九六・一一  
「福岡大学日本語日本文学第六号」、「歯車」解説(二)——〈或狂人の  
娘〉の虚実——一九九八・一二「福岡大学総合研究所報第二〇五号」。
- (3) 「近代的自我の位相——「歯車」」『芥川龍之介論』所収、一九九三・九、  
翰林書房。
- (4) (1)の宮坂覺氏も〈対極的〉の多用を指摘している。
- (5) (3)の奥野政元氏の「歯車」論の中にも〈のみならず〉の多用を指摘し  
ている。
- (6) 『河童』を指す。
- (7) 「民」と題した未完成の作品である。原稿用紙十二枚程度のものである。